丹頂（タンチョウ）

タンチョウ博士のお話（第42回）

タンチョウは“アタマ”がいい？

あいつは頭がいい！というのは、人を評価する場合のほめ言葉としてよく使われますね。評価の対象となる具体的内容はいろいろですが、初めての体験は失敗しても、次からは同じ過ちを繰り返さないような場合などにも使われるでしょう。つまり、学習能力が優れている人などへのほめ言葉としても用いられます。

では、タンチョウは頭が“良い”のでしょうか？

舞鶴遊水地のタンチョウは、2020年から2022年までの３年間は、遊水地内で卵を産み、ヒナを育て、３ヶ月ほど過ぎて幼鳥が飛べるようになってから、家族で遊水地の外へ出て、収穫時に落ちたトウモロコシとか豆などを食べる暮しを繰り返していました。

ところが、2023年は幼鳥が飛べるようになる少し前の８月初旬に、親子３羽で遊水地の外へ出て餌をあさり、イネを倒して塒（ねぐら）を造るなどしたのです。さらに翌2024年は、２羽のヒナがまだ飛べない６月下旬に、遊水地沿いの舗装道路を家族で歩いて耕地へ出かけ、前年と同じように未熟の稲穂を食べ（写真）、水田を塒にして過ごすようになりました。

この状況に、人はどう対応したでしょうか。23年の時は、農家の方々や報道関係者なども加わり、水田から遊水地へ追い返すことに成功し、数日のうちに幼鳥も飛べるようになったため、騒動は収まりました。

しかし、翌24年６月はヒナ連れで、電気牧柵で囲われた水田へ侵入し、暮らし始めたのです。そこで、人は組織的体制づくりと慎重（しんちょう）な計画を基に、ツルを遊水地へ追い返し、なんとか遊水地内での暮らしを保ちました。さらに、昨年も、７月下旬に家族が遊水地外へ出たため、何度か遊水地へ追い戻し、間もなく幼鳥も飛べるようになり、追い返し作業も終わりました。

さて、今年もヒナ１羽が順調に育ち、育雛中に親の１羽が時折遊水地外で目撃されたほか、６月はヒナ連れ家族が遊水地の外へ出ました。しかし、従来同様に追い戻されて７月は遊水地から外へ出ませんでしたが、８月１日に幼鳥も飛んで（これまでで最も早い日時の飛行確認）家族は遊水地の外へ出てきました。

ここまでの経過をみると、遊水地の外へヒナを連れて出ると、“ヒトに追われて危ないから出ないでおこう！”と学習したとは、とても言えません。

家族の移動はオスに主導権（しゅどうけん）がありますが、タンチョウにも個体差があるので、上記の経過はたまたま学習の応用力が弱い個体で起きた現象とも考えられます。あるいは、遊水地内の餌になる動物や植物の状況が、遊水地外の採餌と比べてとても効率が悪いのが原因かも知れません。それを確かめるには番いの一方（特にオス）が変わった場合や、気候条件などで遊水地内の餌資源がどのように変わるかを調べる必要があります。ともかく、“ヒトは私たちを農地から追い払おうとするけれど、本当は私たちのことが好きで、手荒なことはしないから”と頭の良いツルたちが人間の行為を見透かして、耕地を利用し続けているのかなと“判官贔屓（ほうがんびいき）”的に私は思っています。皆さんはどのようにお考えですか。

（文：正富宏之）

長沼町の水田で稲穂をついばむタンチョウ
（撮影：正富宏之）

▶**問合先**　役場企画政策係（☎76-8015）

タンチョウに関する質問を募集します！

タンチョウに関して質問がある方は、下記メールアドレスへご連絡ください。
いただいた質問には、広報ながぬま２月・６月・10月号に掲載予定の
「タンチョウ博士のお話」で正富先生に回答していただきます。

➡ご質問はこちらまで：seisakusuishinka@ad.maoi-net.jp